

## 『春水』手稿： 畢生の贈り物

中里見， 敬  
九州大学大学院言語文化研究院

<http://hdl.handle.net/2324/1913954>

---

出版情報：「『春水』手稿と日中の文学交流：周作人、冰心、濱一衛」国際シンポジウム論文集. 1, pp.172-175, 2018-02-06. 九州大学QR プログラム「人社系アジア研究活性化重点支援」「新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築」

バージョン：

権利関係：



『春水』手稿  
——畢生の贈り物

九州大学 中里見 敬

『春水』手稿の発見は、九州大学にちょっとした『春水』ブームを巻き起こした。論文発表から間もない6月27日、中国駐福岡総領事館の何振良総領事が九州大学附属図書館で『春水』手稿を閲覧し、学生と交流された。その際、2名の学生が『春水』から4首の詩を朗読した。それらは濱一衛先生が1952年に授業で使った講義用プリントに印刷されていたものである。これにより、我々は濱先生が『春水』のどの詩篇を好まれ、授業で学生にどのような講義をしたか想像することができる。

三三

牆角の花！  
你孤芳自賞時，  
天地便小了。

三三

塀の片隅に咲く花よ！  
あなたが誰にも気づかれずひっそりと咲いたとき、  
天地は小さくなる。

六四

嬰兒，  
在他顫動的啼聲中  
有無限神秘的言語，  
從最初的靈魂裏帶來  
要告訴世界

六四

嬰兒は、  
そのふるえる泣き声の中に  
無限の神秘的なことばをもっている、  
最初のたましいの中からもたらされ  
世界に告げようとしているのだ

八八

春徘徊着來到  
這莊嚴的牆上——  
在無邊的清冷裏；  
只能把一絲春意，  
交付與階隙裏  
微小的草兒了。

八八

春がためらいがちにやって来た  
この莊嚴な壁の上に——  
はてしない冷たさとわびしさの中に。  
やっとの思いでひとすじの春の気配を、  
きざはしの隙間の  
微小な草にゆだねる。

一八二

別了！  
春水，  
感謝你一春潺潺的細流，  
帶去我許多意緒。

向你揮手了，  
緩緩地流到人間去罷  
我要坐在泉源邊，  
靜聽回響。

一八二

さらば！  
春水よ、  
あなたのひと春の滔々たる細流が、  
私の幾多の情緒を連れ去ったことに感謝する。

あなたに手を振る、  
ゆっくりと人の世に流れて行け  
私は源泉のほとりに座して、  
静かにその反響を聴こう。

学生の朗読を聞いて、何総領事は次のように言われた。「小学生のとき、先生にこの詩を教わったことがあります、当時はよく理解できませんでした。いまこの年齢になって再読すると、この短い詩に深い哲理のこめられていることがよくわかります。お二人が私たちのために『春水』を朗読してくれたことに感謝します。」

この二名の学生は「中国語ランゲージテーブル」の主催者である。これは昼休みに食事をしながら中国語で交流する活動で、学生がすべて自主的に運営し、日本人学生と中国人留学生の交流に一役買ってきた。『春水』手稿の発見が報道されたあとのランゲージテーブルでは、留学生が『春水』詩篇のコピーを持ってきて、日本人学生といっしょに冰心の小詩を朗読し、鑑賞するなど、九州大学には『春水』ブームが見られた。ほかに、『春水』手稿の報道によって、国内外の親戚や友人に九州大学が知られるようになり、九大の留学生として誇りに思います、といったメッセージが多くの留学生から寄せられた。

95年前、北京大学教授であり燕京大学でも教えていた周作人は、自分の学生である冰心の小詩を高く評価し、「論小詩」という評論を書いて、出版に尽力した。その17年後、周作人はかつて留学生として自宅に寄宿したことのある若き日本人・濱一衛に『春水』手稿を贈った。さらに長い年月を経て、周作人の贈り物は九州大学附属図書館濱文庫で改めて発見され、我々九州大学の学徒に日中文化交流の機会をもたらしてくれたのである。日本の主要新聞はすべて『春水』手稿のことを報道したが、冰心の文学上の成果や意義だけでなく、周作人と濱一衛の師弟関係についても触れていたことに、我々は感慨を新たにした。

濱一衛が1930年から1933年にかけて京都帝国大学で学んだ際、中国文学の指導教官は鈴木虎雄教授と倉石武四郎助教授であった。さらに傳芸子先生にも中国語を習っている。

当時、中国留学を終えたばかりの倉石武四郎は新進気鋭の学者であり、伝統的な訓読を廃して、中国古典も現代文学もすべて中国音で読むという画期的な教育方針を採用した。倉石はさらに傅芸子先生と中国語で交流することを学生たちに強く勧め、京都帝国大学に中国語熱が巻き起こったのである。濱一衛はその中の一人であった。濱は学外でも中国からの留学生を熱心に援助し、周作人の息子・周豊一と知り合った。周豊一は1930年秋に大阪へやって来て、翌春の入学試験に備えていた。おそらく濱の助けもあって、豊一は見事、浪速高等学校(現在の大阪大学豊中キャンパス)に合格する。当時、高等学校の卒業生はほぼ全員が帝国大学に進学できたので、豊一とその父・周作人の喜びは想像に難くない。豊一の留学生活は充実したものであったようで、多くの友人ができ、バスケットボール部でも活躍した。ところが、半年後の9月18日、柳条湖事件が勃発し、豊一は何人かの中国人留学生とともに抗議の意思を示して退学する。何か月か後に、日本人の同級生たちが北京の豊一に、早く戻ってきて勉学を続けるように、との寄せ書きを送ってきたが、豊一が復学することはなかった。こうした事実は、周豊一が晩年に濱一衛との交友を回顧した文章に記されている。周豊一が自ら日本語で書き綴った文章は大変感動的で、しかもユーモラスであり、豊一氏の人柄、そして二人の純粋で高尚な友情を想起させるに余りある。

筆者は1980年代に大学で中国語の勉強を始めた。濱先生の時代とは異なるものの、よき師友に恵まれて中国文学研究の道に進んだ点は、濱先生と同じである。私にも中国語を教えてくれた中国人の恩師がいる。1944年に北京から日本へ土木工学を学ぶために派遣された河北省出身の趙迺桂先生である。出発前に趙先生の両親や親戚は、戦争はまもなく終わる、日本は負けるだろうから、息子よ、早く帰ってくるのだよ、と言って送り出したという。1年もたたずに、日本は敗戦となり、趙先生は中国へ帰国する機会を失った。先生はそのまま日本にとどまり、10年ほど前に日本で亡くなった。

趙先生が私に中国語を教えていたころ、先生は60歳過ぎの好々爺であられた。日本で結婚し、お子さんも結婚して独立され、何ら後顧の憂いもなさそうであった。先生は温顔を絶やさず、大人の風格を備えておられた。授業ではよく中国の生活習慣や中国人の考え方について話をされた。ときには家族や友人の思い出を話されることもあったが、ついぞ恨み言を聞いたことはない。中国語の授業であるにもかかわらず、先生はいつの間にか日本語でこのような話をされるのであった。我々は趙先生の話す、教科書以外の話を聞くのが大好きだった。中国語を学ぶだけでなく、もっと大事なことを先生から教わり、中国の社会や文化についても深く理解できるようになったように思う。私と同級だった6名の学生のうち、3名が大学で中国語や中国文学を教える教員になり、1名は海外で日本語を教えている。趙先生の授業を受けたからであるに違いない。私が濱先生の周作人に対する気持ち

を多少なりとも理解できるような気がするの、おそらく私の趙先生への思いを知らず知らずのうちに重ね合わせているからかもしれない。

濱一衛が1939年に北京を離れて以後、二度と再びその地を踏み、周作人にお礼を言うことはなかった。濱先生はこのことを家族に対して繰り返し後悔の念とともに語っていたという。周作人が濱先生に贈った『春水』手稿は、こうして周作人畢生の贈り物となった。そしてこの贈り物はまた、周家と濱家が経験した戦中戦後の困難な時代の生き証人ともなったのである。

謹んで小文を冰心先生、周作人先生、周豊一先生、濱一衛先生、そして我が恩師趙迺桂先生に捧げる。

附記：『春水』手稿の論文発表前後において、華東師範大学の潘世聖教授、北京第二外国語学院の趙京華教授、冰心文学館、『中国現代文学研究叢刊』編集部、関西大学名誉教授の萩野脩二先生、早稲田大学の小川利康教授より多大な援助を賜った。記して衷心より謝意を表したい。

(『愛心』2017年夏季号(総第63期)、2017掲載の拙稿「《春水》手稿：畢生的礼物」を日本語訳して再掲)

本研究は科研費(16H03405)の助成を受けた。